（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第46輯

平井遺跡Ⅱ

都市計画道路松原泉大津線並びに
近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

平成元年10月

大阪府教育委員会
財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第46輯

平井遺跡 II

都市計画道路松原泉大津線並びに
近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

平成元年10月

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序　　　文

平井遺跡は、古代において全国的な規模を誇る須恵器生産地として著名な陶邑古窯群の近く、堺市平井に所在します。

皆様もご承知の通り、関西新空港は大阪府にとっても、また国家的にみても重要な事業であります。この新空港の重要なアクセス道路の一つである近畿自動車道松原海南線及び松原泉大津線は、出来るかぎり早期に着工され供用を開始することが望まれる路線の一つです。本遺跡は、これら路線が併行して建設される地点に位置します。

調査は昭和61年度より数次にわたり調査の結果は既に平井遺跡報告書として刊行されております。調査の結果、当初予想していたよりも大規模な遺跡であり、生活の跡も古く旧石器時代にまでさかのぼることが判明し、遺構、遺物からみても全国的な遺跡であることが明確となりました。

詳細については、報告書に詳しく記載されておりますが、今回の調査により、泉北地域の古代から近世にかけて、とりわけ中世の集落研究及び土器の生産と流通を考察する基礎資料が出来たものと考えております。

調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました日本道路公団、堺市教育委員会をはじめとする関係各位に謝意を表すと共に、直接調査を担当した（財）大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝申し上げます。

これからの文化財行政に対するご理解とご協力をお願いします。

平成元年10月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　川　瀬　　誠

序

平井遺跡は、石津川支流陶器川右岸の中位段丘に所在し、古墳時代の窯業生産地として著名な陶邑古窯群の北辺にあたり、古代から開発の進展した地域に位置します。本遺跡の調査は昭和61年度より数次をかけて行ない、既に昭和63年３月に当協会が調査報告書を刊行しております。詳細は報告書に記述した通りですが、旧石器時代の石器、古墳時代の溝跡、平安時代の集落跡、鎌倉時代の集落跡、また鎌倉時代の集落に設置されていた瓦器焼成窯、室町時代の環濠集落や水利施設など考古資料としては一級のものです。

本年度は、前回の調査の際には現有の道路として使用されていたため、調査が出来なかった府道部分に関しての調査を行ないました。

調査の結果、室町時代の環濠集落に該当すると考えられる大規模な掘りの跡を確認することが出来ました。

これだけ各時代の貴重な考古資料を得られたことは、当協会といたしましても、今後の研究に大いなる貢献をしたものと自負いたしております。

調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会をはじめとする関係各位に謝意を表すと共に、優秀な職員を派遣していただいています近畿府県、大阪府下市町の教育委員会に対し深謝申し上げます。

平成元年10月

（財）大阪府埋蔵文化財協会

理 事 長　仁賀奈　祐　吉

例　　　　　　　言

1．本書は、堺市平井に所在する近畿自動車道松原海南線、府道松原泉大津線建設に伴い実施した平井遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府埋蔵文化財協会が平成元年３月と７月～９月にかけて実施した。

3．調査は、調査課渋谷高秀が担当した。

4．編集は渋谷が行ない、執筆は第２章第１節・第３章遺物のうち瓦については、技師・近藤康司が担当し、他は渋谷が担当した。出土遺物の写真は、小倉　勝が担当した。

5．調査に際しては堺市教育委員会高島　徹・北野俊明・小谷正樹の各氏から御教示をえた。記して感謝する。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……………………………………………………………渋谷……　1

第２章　調査成果………………………………………………………………………………………　2

　第１節　既往の調査とその成果……………………………………………………近藤……　2

　第２節　調査の目的と方法…………………………………………………………渋谷……　4

　第３節　遺構と遺物……………………………………………………………………………　5

　　1．基本層序……………………………………………………………………渋谷……　5

　　2．遺構……………………………………………………………………………渋谷……　5

　　3．遺物……………………………………………………………………………近藤……　9

第３章　まとめ…………………………………………………………………………渋谷……　16

挿　図　目　次

第１図　平井遺跡位置図…………………………………………………………………………　1

第２図　明治初期平井遺跡周辺の景観…………………………………………………………　3

第３図　周辺遺跡分布図…………………………………………………………………………　3

第４図　調査地点位置図…………………………………………………………………………　4

第５図　基本層序…………………………………………………………………………………　5

第６図　遺構平面図………………………………………………………………………　7～8

第７図　Ｃ地区１－ＯＢ平面図…………………………………………………………　7～8

第８図　41－ＯＳ土層断面図……………………………………………………………　7～8

第９図　41－ＯＳ土層断面図……………………………………………………………　7～8

第10図　47－ＯＯ出土遺物実測図……………………………………………………………　10

第11図　41－ＯＳ（11－14）、１－ＯＯ（10）出土遺物実測図 ……………………………　11

第12図　41－ＯＳ出土遺物実測図（２）……………………………………………………　12

第13図　41－ＯＳ出土遺物実測図（３）……………………………………………………　13

第14図　41－ＯＳ出土遺物実測図（４）……………………………………………………　14

第15図　中世包含層出土遺物実測図……………………………………………………………　15

図　版　目　次

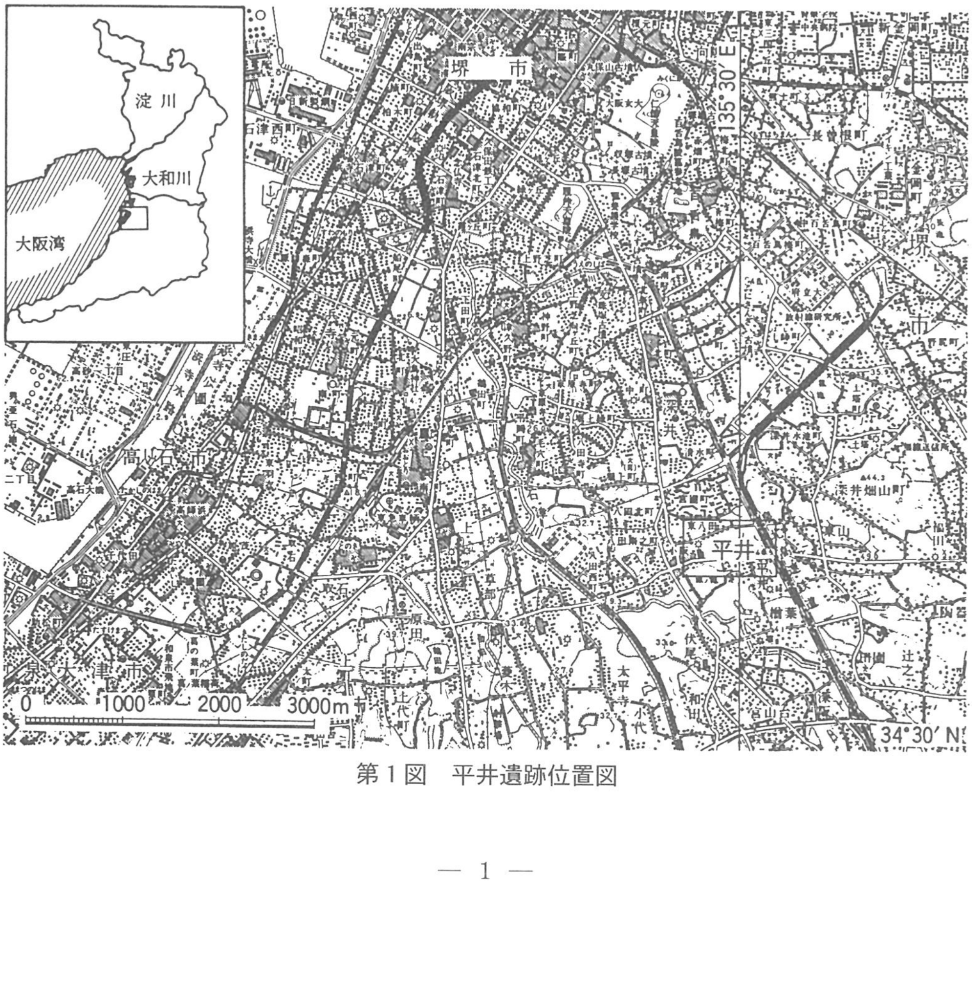
図版１　航空写真
図版２　遺跡　　全景
図版３　遺跡　　古墳時代土坑・平安時代中期掘立柱建物跡
図版４　遺跡　　中世遺構
図版５　遺跡　　近世鋤溝
図版６　遺跡　　土層断面
図版７　遺物　　47－ＯＯ・41－ＯＳ
図版８　遺物　　41－ＯＯ
図版９　遺物　　47－ＯＯ・中世包含層
図版10　遺物　　41－ＯＳ
図版11　遺物　　41－ＯＳ
図版12　遺物　　41－ＯＳ

第1章　調査に至る経緯と経過

泉北丘陵を横断する全長数十㎞にも及ぶ近畿自動車道松原海南線、松原泉大津線建設に伴い実施された各遺跡群の発掘調査により、膨大な量の考古資料が蓄積され、「堺」の各時代の地域の様相が鮮明になりつつある。

平井遺跡は、近年では堺市教育委員会が実施した長崎屋建設予定地や当協会が実施した府道松原泉大津・近畿自動車道和歌山線建設に伴う調査など、多くの考古資料が蓄積されている。とりわけ、当協会が実施した調査は、池あるいは堤等も含んだ大規模な調査であり、平安時代中期・10世紀後半から11世紀前半にかけての集落跡、12世紀後半から13世紀前半にかけての中世集落跡やこれに伴う瓦器窯など多くの問題点を提起し、和泉国八田荘の「段丘」面の開発時期や集落の在り方について多くの考古資料が蓄積・提示された。

今回の調査は、昭和61年から翌年にかけて実施した当協会の調査対象地からは、現道で使用されている府道であったため、除外された未調査部分である。府道部分の切り替えは



第1図　平井遺跡位置図

平成元年3月に実施された。これに伴い同月、アスファルト等の撤去作業を行なった。調査区内の既設管の撤去・設置が6月～7月にかけて堺市教育委員会の立ち会い調査を伴って実施された。発掘調査は7月中旬より行なった。調査はアスファルト・コンクリートの撤去・機械掘削を8月前半に実施し、人力掘削は8月中旬より開始した。前回の調査において検出していた遺構のつなぎ・確認に主眼を置いた。大阪府教育委員会の立会は調査が最終段階の9月後半に行なわれ、重要な遺構に関しての保存協議を行なった。その結果、検出された遺構のうち砂の埋め戻しは、古墳時代後期の溝・平安時代中期の掘立柱建物・中世後期の大溝について、橋脚部分を除いて行なった。測量は機械掘削終了時の7月後半に、3級基準点・4級基準点の打設を行なった。航空測量については9月後半に一回最終面で実施した。埋め戻し作業を9月末までに行ない、調査を終了した。整理作業は、現場作業中と10月に実施し報告書刊行にいたった。

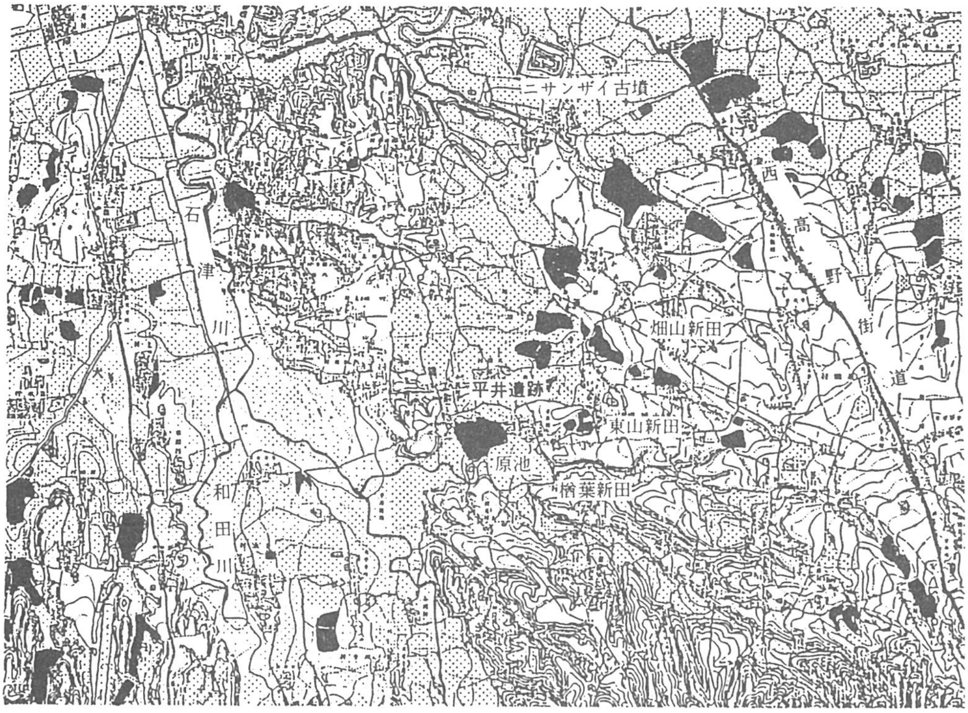
第2章　調査成果

第1節　既往の調査とその成果

平井遺跡においては過去、当協会が近畿自動車道和歌山線内においては3次にわたる調査を実施した。また、堺市教育委員会においても当遺跡内の調査が実施されていた。さらに、今回の調査地に西接する位置にある長崎屋建設に伴う調査も実施された（小阪遺跡内）。ここでは、これらの既往の調査を簡単にみていくことにする。

まず、当協会が実施した3次の調査成果からみると、10世紀後半から末、12世紀末から13世紀前半の集落が検出されている。集落は掘立柱建物により構成され、数棟をもって一つの単位を形成していたようである。また、注目すべき遺構として13世紀のものと考えられている瓦器焼成窯がある。さらに、15・16世紀の良好な一括遺物を出土する遺構が検出されているが、当該期の集落は検出されていない。

次に、堺市教育委員会の調査では、堺市平井中学校内では古墳時代中期から後期を中心とする遺構が検出されている。なかでも、河川内出土の須恵器の状況から付近に窯跡、及びその関連施設の存在が示唆されている。また、長崎屋では14世紀後半以後を中心とする農耕地が検出されており、出土遺物からは付近に集落の存在が想定されている。この遺跡の土器の在り方は平井遺跡ともあわせて考えていくべきであろう。



第２図　明治初期平井遺跡周辺の景観

1.鳳東町遺跡
2.深井清水町遺跡Ａ地点
3.深井清水町遺跡Ｂ地点
4.華林寺跡
5.毛穴遺跡
6.上遺跡
7.鈴の宮遺跡
8.八田北町遺跡
9.堀上町遺跡
11.東半田遺跡
11.小阪遺跡
12.八田西町遺跡
13.万田遺跡
14.万崎遺跡
15.草部遺跡
16.鶴田池東遺跡
17.西浦橋遺跡
18.菱木下遺跡
19.菱木遺跡
20.万崎池遺跡
21.太平寺遺跡
22.伏尾遺跡
23.小代古墳群
24.大庭寺遺跡
25.深田橋遺跡
26.菱木上遺跡
27.山田北遺跡
28.山田古墳群
29.山田遺跡
30.昭和池古墳
31.陶邑古窯址群

第３図　周辺遺跡分布図（1/4万）

第2節　調査の目的と方法

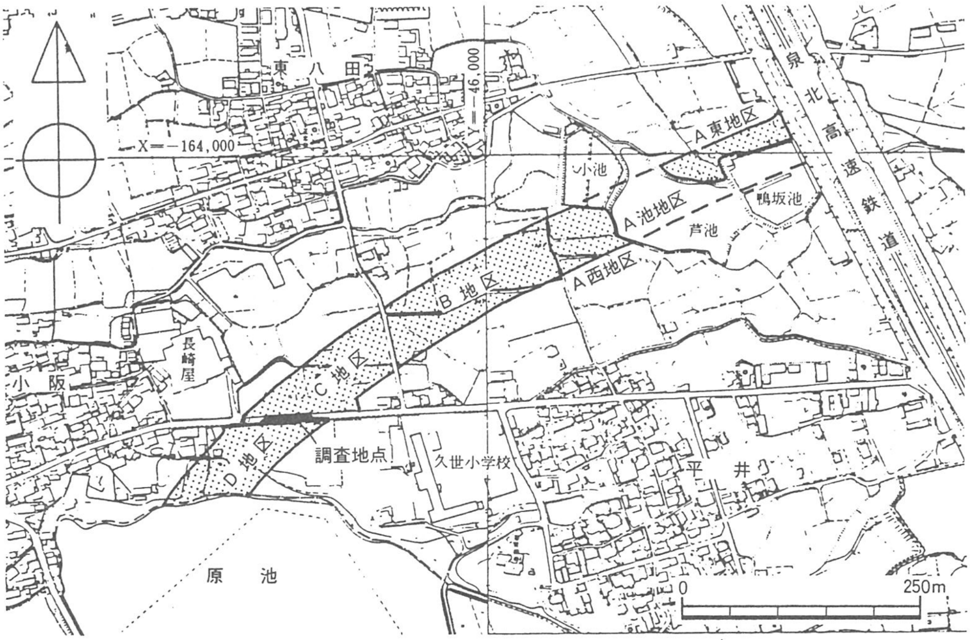
近年の大規模に実施される埋蔵文化財の発掘調査は、開発に伴うものが主である。とりわけ関西新空港建設に沸く泉州地域においては、ほとんどの調査が開発に伴うものであり、遺跡の系統だった調査や基礎的な分布調査・試掘調査によって遺跡の内容の確認されたものは少ない。しかし、遺跡台帳に記載された遺跡とは別に、開発が決まると分布調査・試掘調査を行ない、遺跡と把握されるものも数多く存在する。土地全てが遺跡かのような状況も呈する。それ故、開発が有無を言わさず遺跡の内容を明確にしていくという側面も顕著に目立つようになる。

調査方法、地区割りやその他一切の現場での作業は本協会指定の調査規程に従った。

調査の目的は、61・62年度に調査したC・D地区で確認された遺構の延長を把握し、より詳細な遺構の時期や堆積状況をつかむ事を目的に実施した。具体的には以下のようになる。

1．C地区で検出されていた47－ＯＳ・32－ＯＳの延長を確認し時期の把握をすること。

2．01－ＯＢの柱穴の延長を検出し、掘立柱建物の規模を把握すること。更に前回出土遺物がないことにより、廃絶時期が不明であったのでこの点に十分に注意すること。



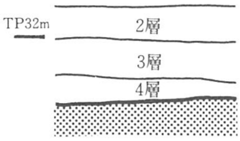
第4図　調査地点位置図

第３節　遺構と遺物

古墳時代後期の溝、土坑・平安時代中期の掘立柱建物・中世後期の集落をめぐる大溝等を中心にする遺構・遺物を検出した。大溝の検出は予想外の成果である。また、前回の調査で確認されていたＣ地区の掘立柱建物の時期が黒色土器が出土したことによって、廃絶された時期が明確になった事も成果として上げられよう。

１．基本層序

調査区の基本層序は、１層～５層に区分できる。１層・現在盛土は、コンクリート・路盤で構成される。時期は現在である。２層は耕作土である。時期は近代から現在に及ぶ。３層は近世の瓦等を含む層である。４層は部分的に堆積する層で、主に調査区の東側に存在する。中世遺物、主には細片となった瓦器椀を含む層である。遺構は第３層上面と第５層上面で検出した。



第５図　基本層序

２．遺　構

⑴古墳時代後期（第６図・図版３）

当該期の遺構・遺物は段丘の上の、所謂集落に関係すると考えられるものと原池の斜面、所謂窯に関係すると考えられるものに区分される。従来の成果から遺構は、Ｂ・Ｃ地区で検出された自然河川があり、また、遺物はＢ・Ｃ・Ｄの各地区に分布する。

48－ＯＳ

幅0.6～1.7ｍ・深さ0.5ｍ前後の溝を調査区内30ｍにわたって検出した。Ｃ地区で確認されていた溝320の延長線上であるため、同一の遺構と考えられる。肩の落ちや平面形状からは、凹地状の落ちに流れる自然河川と考えられる。近接して検出されたＣ地区の溝76も地形から考えて、人工的に掘削したものではなく、自然の凹地に流れる溝と考えられる。

１～４－ＯＯ

遺物は出土しないが、土質から考えて古墳時代後期の土坑と考えられる遺構が４基、１～４－ＯＯが存在する。土坑は近接して調査区の北東で検出される。平面形状は円形や楕円形を呈し、底面は凹凸が激しい。直径１ｍ以上、深さ0.2ｍ前後である。遺構相互の位置関係や規模から遺構の性格を推定すれば、地形の凹凸、単なる窪みと考えられる。

⑵平安時代中期（第６図・図版３）

平安時代中期、主には瓦器椀出現直前段階の遺構は、今回調査した地点の北側Ｃ地区に集中的に存在する。古墳時代後期の自然河川76－ＯＳを整地して埋めた時期が当該期であり、その西側には完形の黒色土器椀・皿が入れられた土坑が、また、１～３－ＯＢの三棟の掘立柱建物が検出されている。

１－ＯＢ

調査区の北側中央で柱穴を検出した。前回の調査でＣ地区で検出した１－ＯＢの掘立柱建物の延長上に位置する。Ｃ地区で検出した建物は、柱穴の埋土に遺物は含まれなかったが、今回黒色土器の高台部分が出土したため、平安時代中期の建物と考えることが可能になった。２×５間の建物で磁北方向に建てられている。

⑶室町時代（第６図・図版４）

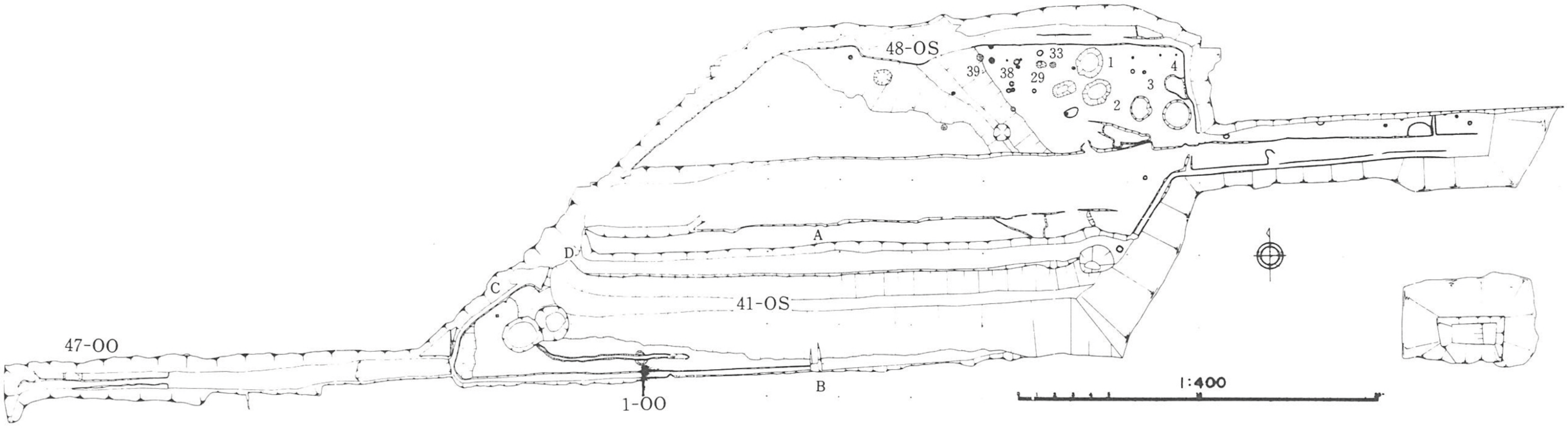
平井遺跡の一大盛期の時期であり、検出される遺構や出土する遺物の量には目を見張るものがある。当該期の資料は、平井遺跡では、主には水利施設と考えられていたが、今回の調査成果は、14世紀後半から15世紀にかけての集落跡、館跡の存在の可能性を示唆する。

41－ＯＳ

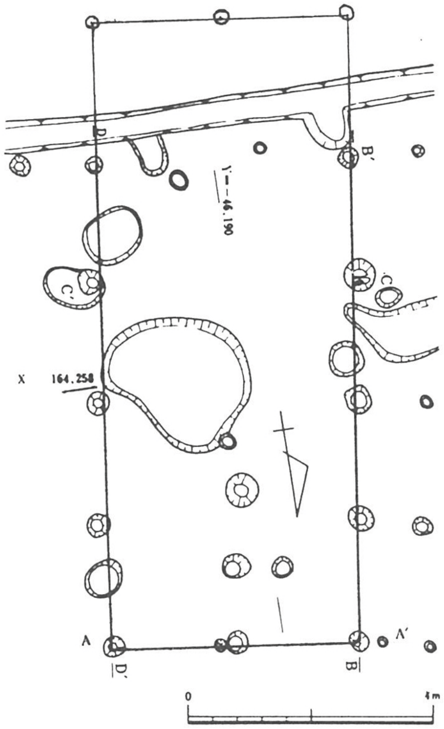
幅4.8ｍ以上、深さ1.4ｍ以上の溝を調査区内30ｍで確認した。溝は調査区内の西側で直角に北方向に折れて曲がる。Ｃ地区で確認されている溝47に直角方向で繋がり、また溝280と平行する。溝47と溝280の関係は不明であるが、延長線上では交錯する位置にある。これら一連の溝に関しては、土地を長方形に区画するための機能を持った遺構として把握することが可能である。方形に区画する機能を持った遺構とすれば、規模も大きく、長さも長いため「掘」と考えられよう。280－ＯＳ・47－ＯＳ・41－ＯＳからは、瓦の破片や完形品が大量に出土しており、近世から現代の削平により遺構は存在しないが、瓦葺きの建物が存在した可能性が極めて高い。

47－ＯＯ

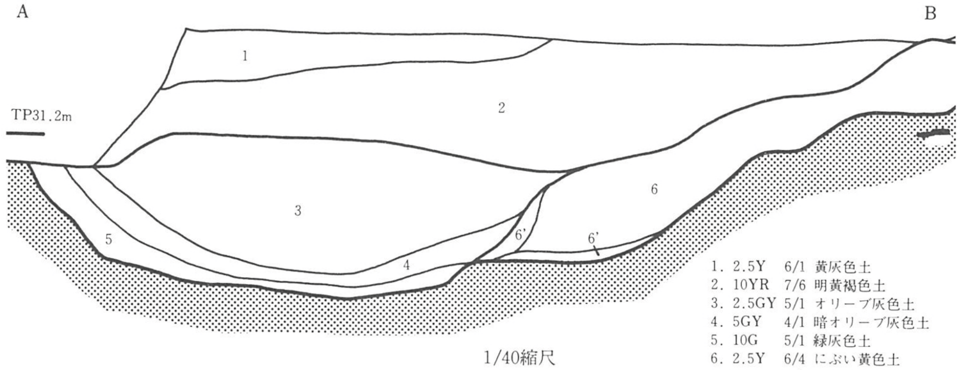
調査区の西側で、楕円形を呈する土坑を検出した。長辺1.5ｍ・短辺1.0ｍである。埋土は一層で、短期間に埋められている。出土遺物は瓦器椀・皿等の14世紀後半段階の一括資料である。



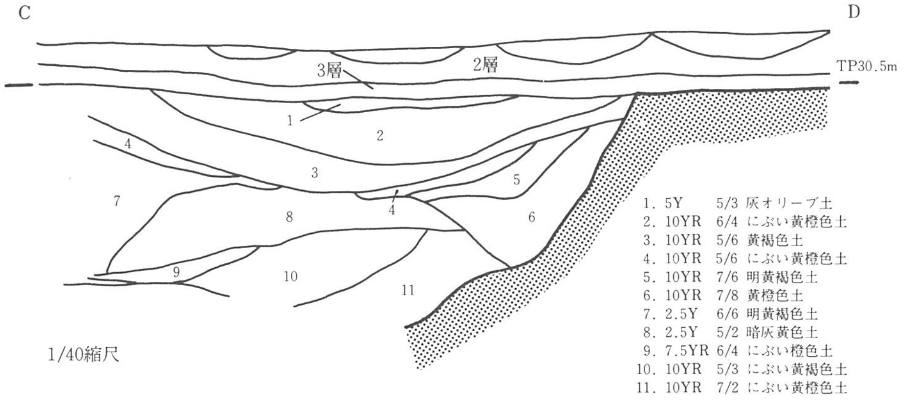
第６図　遺構平面図



第７図　Ｃ地区１－ＯＢ平面図



第８図　41－ＯＳ土層断面図



第９図　41－ＯＳ土層断面図

⑷近世～現在

明治以降の井戸が３基検出された。平面形状は円形を呈する。埋土は一層で、一気に埋められている。出土遺物は現代の瓦・陶磁器が出土する。他の２基は、埋土は一層で、出土遺物はない。他に現代の水道管・電気線・下水道等の攪乱が調査区を横断する。

３．遺物

中世後期を中心にした遺物が出土した。量的にはコンテナにして７箱と少ない。土器・瓦がある。石器・木器は出土しない。土器は器壁の摩滅したものが多く、また、細片となったものが多い。

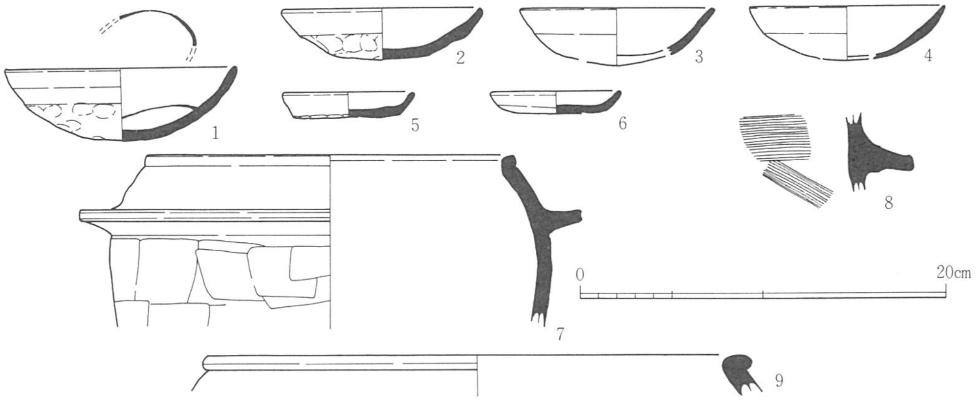
⑴１－ＯＯ（第11図）

小さな掘り方の中に、甕が埋地されていた（10)。やや長胴形の体部に屈曲外反する口縁部を付ける。内外面の調整は器壁が摩滅したため不明である。平安時代前期の甕であろうか。

⑵47－ＯＯ出土遺物（第10図・図版９）

14世紀後半の良好な一括資料が出土している。堆積状況からは、数次にわたって遺物が投棄された状況ではなく、同時期に廃棄或いは埋地された状況である。

瓦器椀・皿・土師器皿・羽釜・瓦質甕が出土する。瓦器椀（１～４）は既に高台を消失した段階のもので、内面の暗文が僅かに残存するのみである。体部下半の指押さえは強く施される。瓦器皿（５）は、口径が小さくなっている。土師器皿（６）は口縁部をナデ調整する。底部のナデ調整は消されている。羽釜（７～９）は焼成の良好な土師質のもので、口縁部の外反は短い。口径の大きなもの（９）と小さなもの（７）がある。体部外面の調整は板状の工具でナデ調整する。瓦質甕は、体部の破片で、外面にはタタキを内面には細かいナデ調整を行なう。既に瓦質土器の甕は、羽釜や擂鉢よりも早く出現している状況が判明する。出土遺物の時期については、瓦器椀や土師器小皿の口径の大きさ、羽釜の口縁部の短さ等、時期差は存在しないものと考えられる。供膳形態の大小の区分は当該期においても徹底して貫徹される。瓦器椀については当該期の特色である口縁部下半の指押さえが極端に強く施される。この事実は、工人の一つの大きな特徴として把握することが可能であり、流通の問題を考察する際の地域色把握の根拠として上げられよう。この瓦器椀が一定地域に分布するのであるならば、椀として最終末の瓦器であるが故に、地域色豊かな供膳形態である瓦器椀の製作工人がどの程度の範囲で存在したのか、瓦質土器が出現する



第10図　47－ＯＯ出土遺物実測図

直前段階の工人の在り方は、細分された前代同様の工人組織か或いは再編成、統一された工人組織か等の資料となろう。提起された問題の広がりは大きい。

⑶41－ＯＳ出土遺物（第11～14図・図版８）

堆積層は基本的には三層に区分されるが、上層と中層の二層は埋められた土で、最下層が溝本来の堆積土と考えられる。遺物は層位によって時期的な区分は存在しない。

瓦器椀・皿・土師器羽釜・瓦質羽釜・摺鉢・甕・蓋・須恵器甕・陶器甕・瓦が出土する。小破片が多く、器壁も摩滅したものが多い。瓦器椀は高台が消失した時期のもので、摩滅した小破片が多い。瓦器皿（11）は、瓦器椀の高台が消失した時期に共伴する口径、器高共に小さくなったものである。口縁部はナデ調整する。瓦質摺鉢（15～17）は、口縁部形状が下方に発達したもので、体部外面の調整は口縁直下まで削り調整する。15はやや焼成が悪いが、他の羽釜は焼成良好な瓦質焼成である。時期は、15世紀前半から16世紀前半段階のものまで含む。羽釜（18～21）は、瓦質焼成（18・19）と土師器焼成（20・21）のものがある。土師器焼成の羽釜は、口縁部の内向度が激しい和泉Ｂ型と称される形態と直立した口縁部の形態（20）とがある。21は口縁端部の外反が少なく、玉縁状になっている。最終末の段階の土師器の羽釜であろう。20は口縁外面の段状の形状が浅くなっている。口縁の外反形状からみて、15世紀後半の時期であろう。瓦質羽釜は、口径に大小があり、口縁部の内向度は強い。焼成はよく、胎土には小さい砂粒を含む。14世紀後半から15世紀前半段階の所産であろう。陶器の甕は、口縁部の外反が強く、口縁端部を僅かに突出させる。肩部には自然釉がかかる。形状からみて常滑産であろうか。

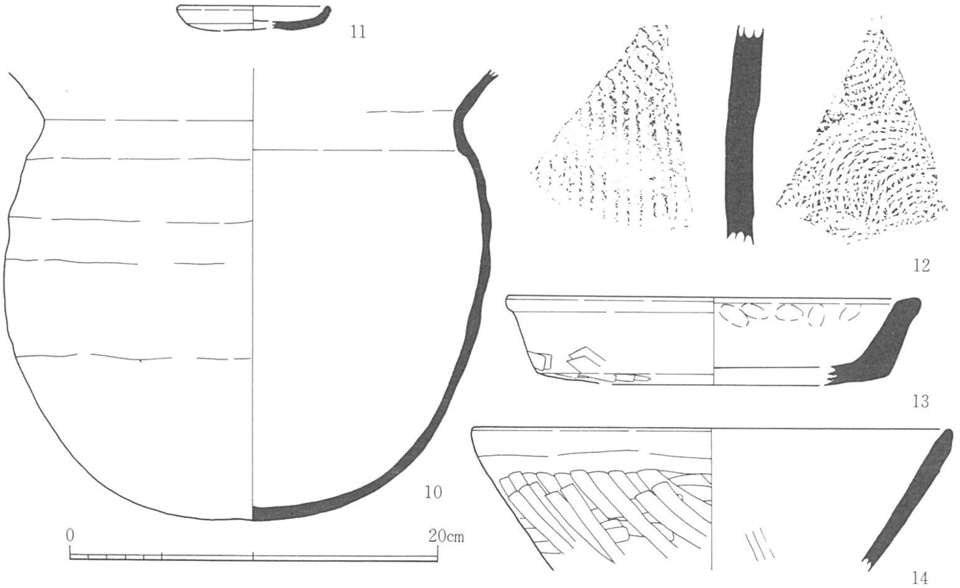
瓦類は中世及び近世のものが出土した。軒丸瓦２点、軒平瓦１点、丸瓦・平瓦は合わせてコンテナ１箱半である。

軒丸瓦　軒丸瓦は２点出土し、共に巴文瓦である。１は、瓦当面上半部の周縁と珠文の部分のみが残存する。周縁は直立素文で珠文との境界には圏線がまわる。珠文は小さい。また、丸瓦部も僅かに残存しており、「印籠つぎ」により瓦当部と接合している。２次焼成を受ける。２は、瓦当部がほぼ完存する。巴は左回りの三ッ巴で頭部は丸く、尾びは短く他の巴とは接しない。珠文はやや大きく15個をめぐらしている。周縁は幅広で直立するが立ち上がりは低い。また丸瓦とは「印籠つぎ」であるが、瓦頭裏面の丸瓦接合部には刻み目をいれている。いぶし焼を行なっている。

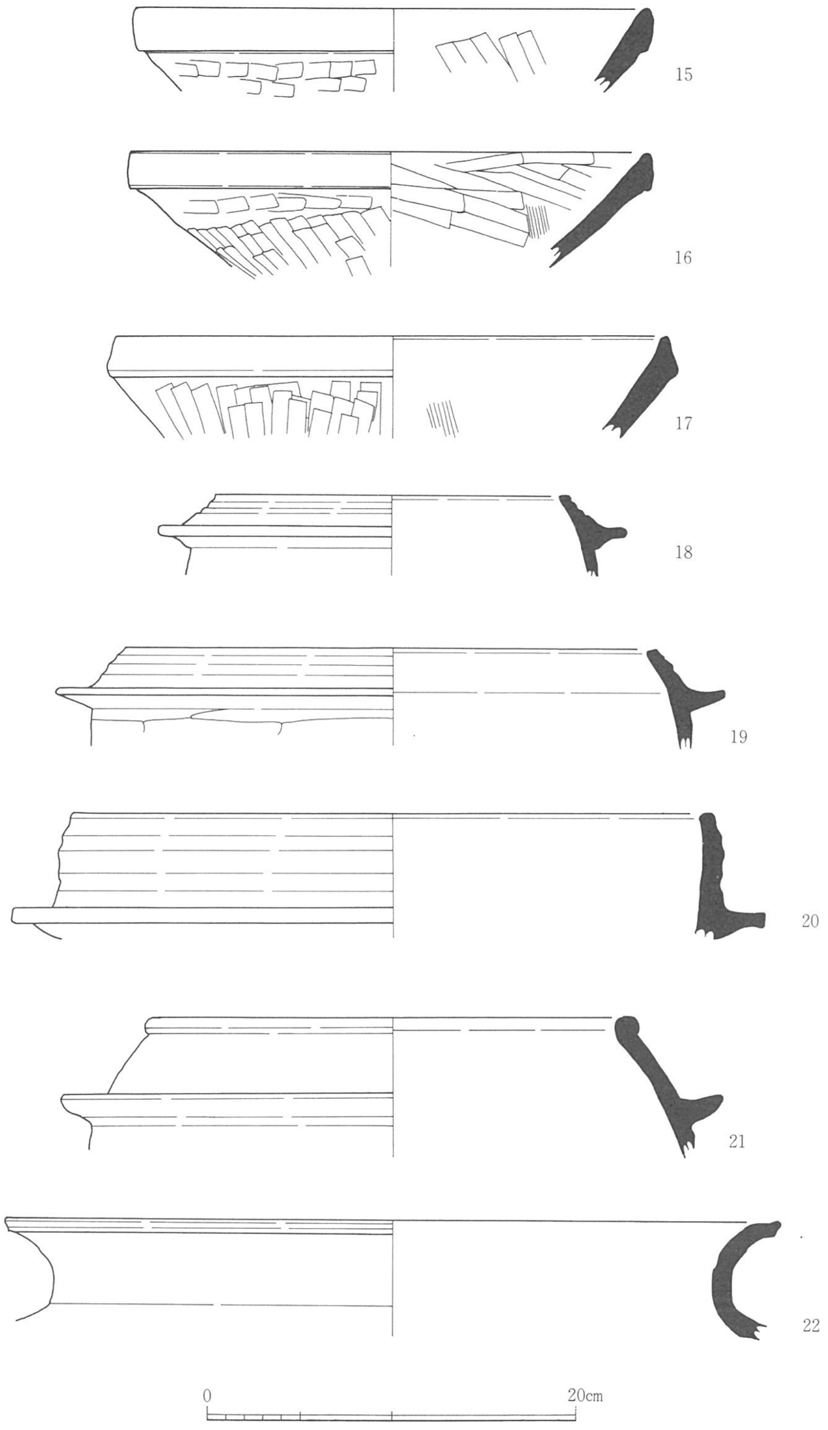
軒平瓦　軒平瓦は１点のみ出土し、瓦当面は右上半部がごく僅かに残存するのみで全体の文様は不明であるが唐草文であることは間違いがない。周縁は直立素文で脇部はやや幅広である。

丸瓦　丸瓦は、小破片ばかり全部で24点出土した。うち玉縁部が残存するものは４点であり、その形態、玉縁部から丸瓦部にかけてのヘラケズリの方法などは各々異なる。また、丸瓦の凸面には布目圧痕が見られる（内面はナデ)。

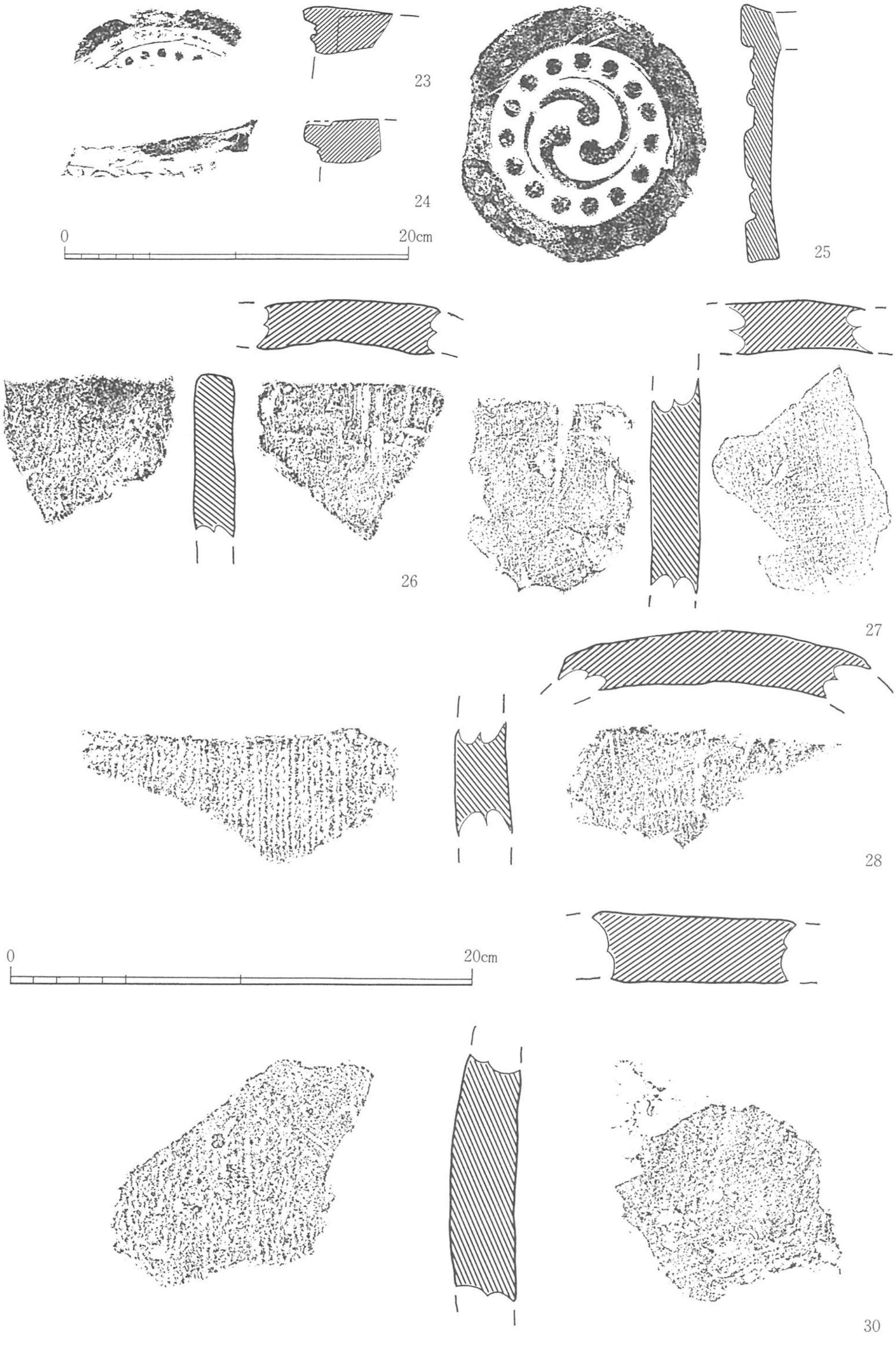
平瓦　平瓦は全部で62点出土した。これらは製作技法により以下７種類に分類できる。



第11図　41－ＯＳ（11～14)、１－ＯＯ（10）出土遺物実測図



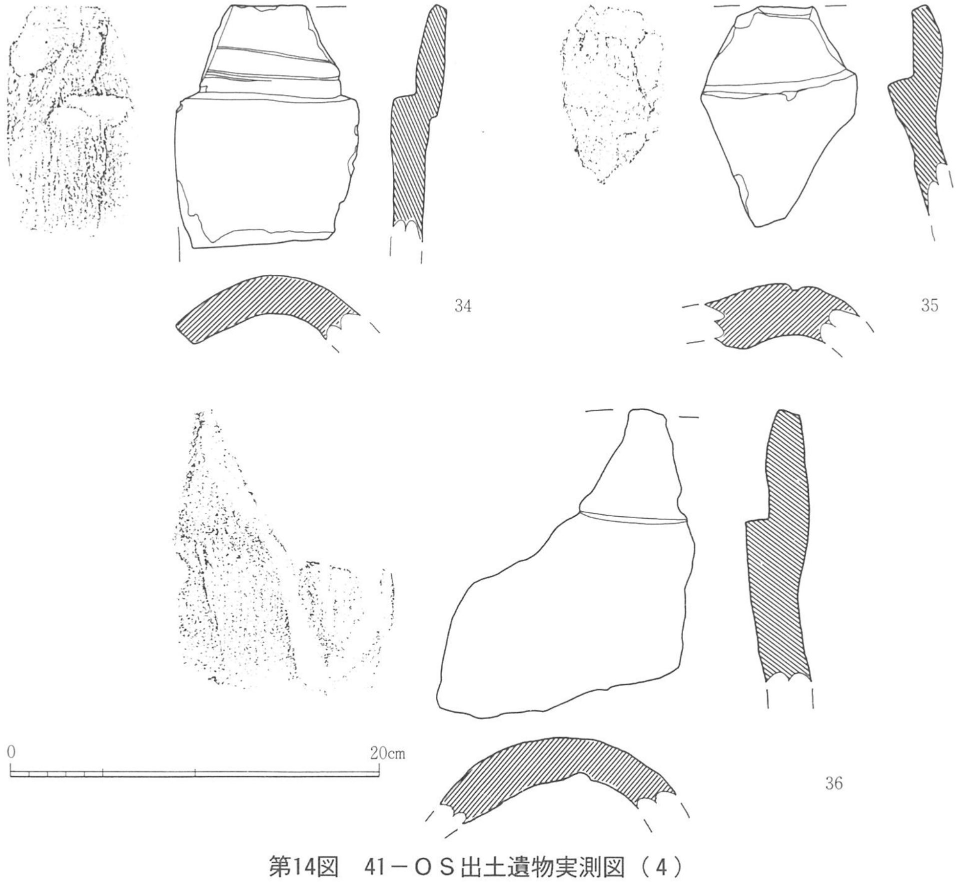
第12図　41－ＯＳ出土遺物実測図（２）



第13図　41－ＯＳ出土遺物実測図（３）

	外面	内面	出土点数
1種	縄タタキ＋離れ砂	布目痕	1
2種	離れ砂	布目痕	2
3種	縄タタキ＋離れ砂	布目痕＋離れ砂	2
4種	縄タタキ＋離れ砂	離れ砂	1
5種	離れ砂	離れ砂	18
6種	離れ砂	ナデ	25
7種	ナデ	ナデ	2
不明			11

以上、小破片が大半であるが分類を行なった。点数的には表に見るように5・6種が大半を占めている。なかでも6種は完形、或いはそれに近いものが約4分の1含まれ、大きさを見ると長さ25.4～28㎝、19～21.2㎝で小ぶりの感がある。

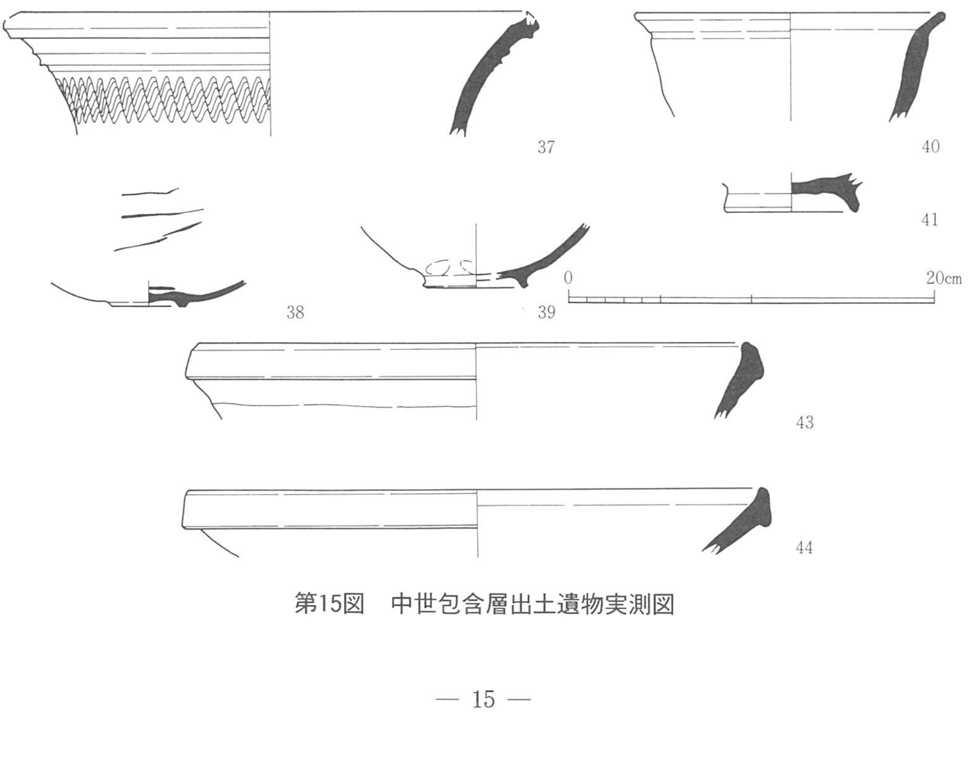


第14図　41－ＯＳ出土遺物実測図（4）

瓦についてまとめると中世と近世のものが見られる。軒丸瓦１、軒平瓦２が中世、軒丸瓦２が近世のものと考えられる。これらと同時期の平瓦は明確な時期区分を行なうのは困難であるが、１～５が中世、６・７種が近世と大きく分けることが可能であると思われる。

⑷中世包含層出土遺物（第15図・図版９）

調査区の東半部に堆積した中世包含層からは、古墳時代後期から中世にかけての遺物が出土した。前回、昭和61年度の調査においても北側に隣接するＣ地区において中世の包含層が検出されており、その延長線上に堆積するものである。包含層に含まれる遺物の量は少ない。瓦器、土師器、須恵器、陶器、瓦質土器が出土する。量的に多いのは須恵器である。最も新しい時期の遺物は瓦質土器の時代、15世紀代である。37は、古墳時代後期の須恵器の壷或いは甕の口縁部で、口縁の外面上半部には二条の突帯を施し、下半には櫛描波状文を施す。６世紀代であろう。38・39は瓦器椀の底部破片で、高台の形状は台形を呈し、見込みには平行線を施す。13世紀前半段階の資料であろう。40は、土師器の鍋であろうか。焼成は良好である。時期については不明である。41は、黒色土器の底部破片であろう。高台が大きい。平安時代中期の所産であろう。43・44は東播系の須恵器捏鉢で、口縁部の形状は端部が上下によく発達する。14世紀代の遺物であろう。



第15図　中世包含層出土遺物実測図

第4章　ま　と　め

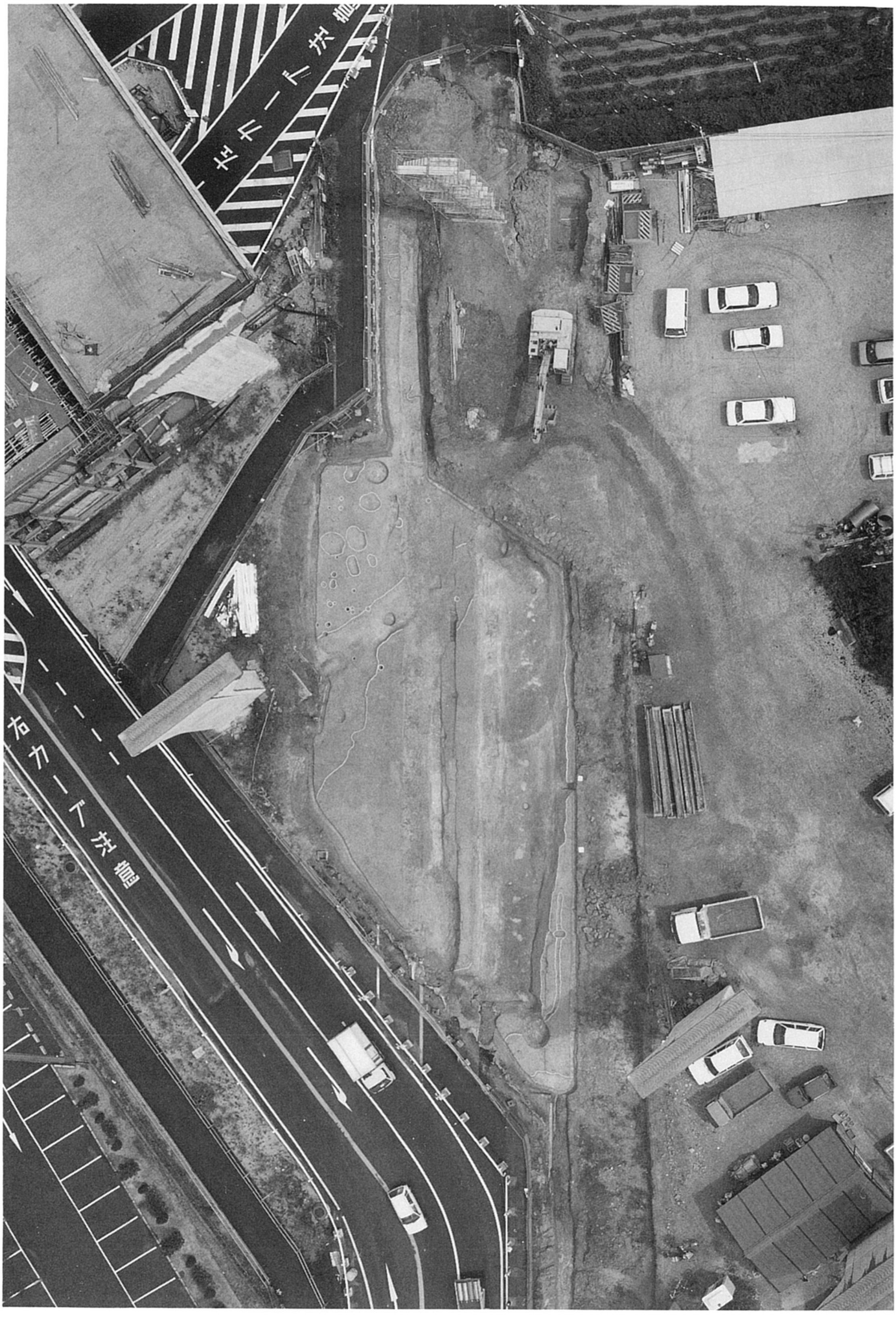
昭和61年度より継続して行なわれてきた近畿自動車道和歌山線・松原泉大津線建設に伴う堺市平井遺跡の調査は、今回の調査によって全ての埋蔵文化財に関する調査が終了した。調査面積は、３万㎡以上にも及び、多くの種類・各時代の遺構・遺物が確認できた。主要な遺構としては、平安時代中期の集落・鎌倉時代前期の集落、瓦器焼成窯・室町時代の水利施設と溜池等多くの成果が上げられる。

今回、空白であったＣ～Ｄ地区間をつなぐ府道部分に対する調査を実施したが、多々上げられる成果のなかで最も大きなものは、大溝41－ＯＳの検出があげられよう。大溝41－ＯＳは、直角に折れ曲がる溝であり、一辺4.8m以上にも及ぶ大規模なものである。これは、当初は東から西にむかって流れる溝と考えられていたが、直角に北方向に折れ曲がる事から、Ｃ地区の47－ＯＳと関係を持つ溝であることが明確になった。41－ＯＳは、Ｃ地区・47－ＯＳと直行して同一の溝になり、またＣ地区・280－ＯＳと平行して走る。これらの遺構は、当初の想定通り、堆積状況や高低差をもつ地形に掘削されていることから、水利施設としての機能を持たされた大規模な溝である事は間違いないが、更に一コーナーの検出ではあるが、方形に区画する機能を持たされた環濠であることが判明したのである。長方形に区画された内部は、近世以降の水田造営や粘土採掘坑によって削平が激しく、平安時代中期の掘立柱建物以外の建物跡は検出されないが、溝の中からは、15世紀から16世紀にかけての土器類と共に大量の瓦類が出土していることから、礎石建物の存在が考えられる状況がある。鎌倉時代前期以降、あらためて段丘面を開発の対象とした、その平井の大開発を主体的に推し進めた在地領主が地域に住み、更には館跡のまわりに水利施設の大溝を巡らすという状況が、ここに浮かび上がるのである。

長方形に区画された、環濠であると同時に水利施設でもあるこれらの「堀」と呼んでいいほどの規模を持つ大溝は、後の時代、17世紀初頭には、短期間のうちに一気に埋められてしまい、整地を行なって水田化する。ここには、さらに発展した生産性の向上、住居域にまで水田を形成する技術力の進展と当然のことながら、溜池築造技術の進歩が見られるのである。

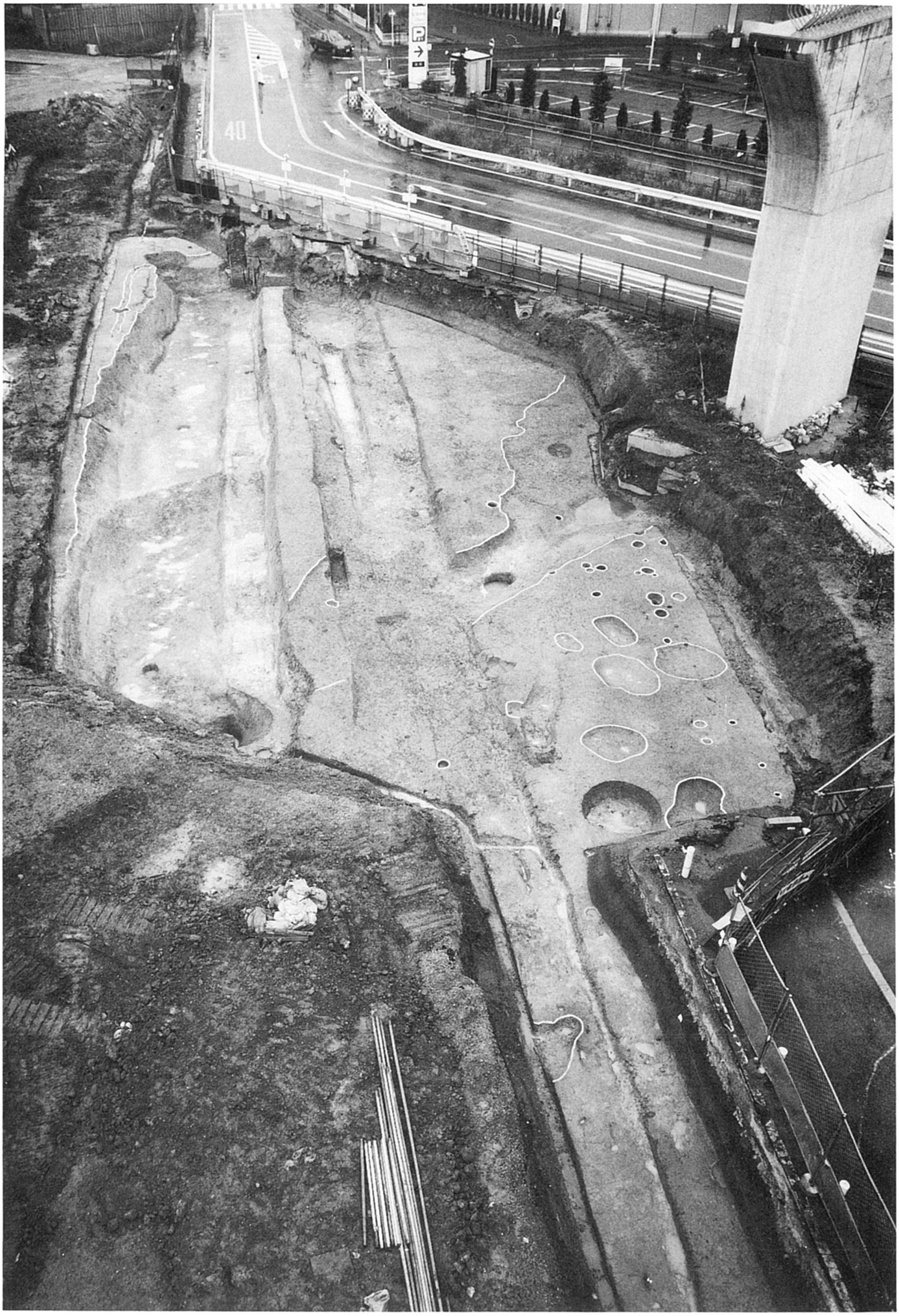
平井遺跡の調査によって、得られた成果は多く、今後の分析によっては、多くの各時代の問題点を多岐にわたって提起するものと考えられる。

図　　　　版



図版1　航空写真

図版２　遺跡　全景



全景（東より）

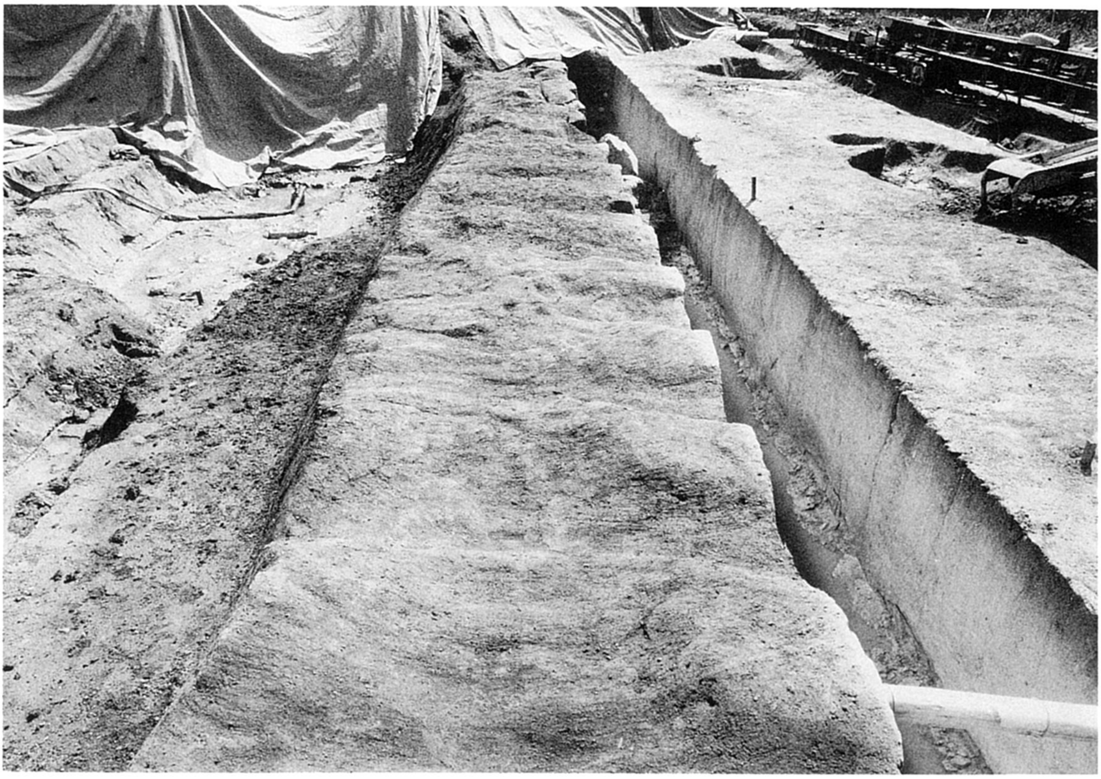
古墳時代土坑・
平安時代中期後半
掘立柱建物跡
（南より）

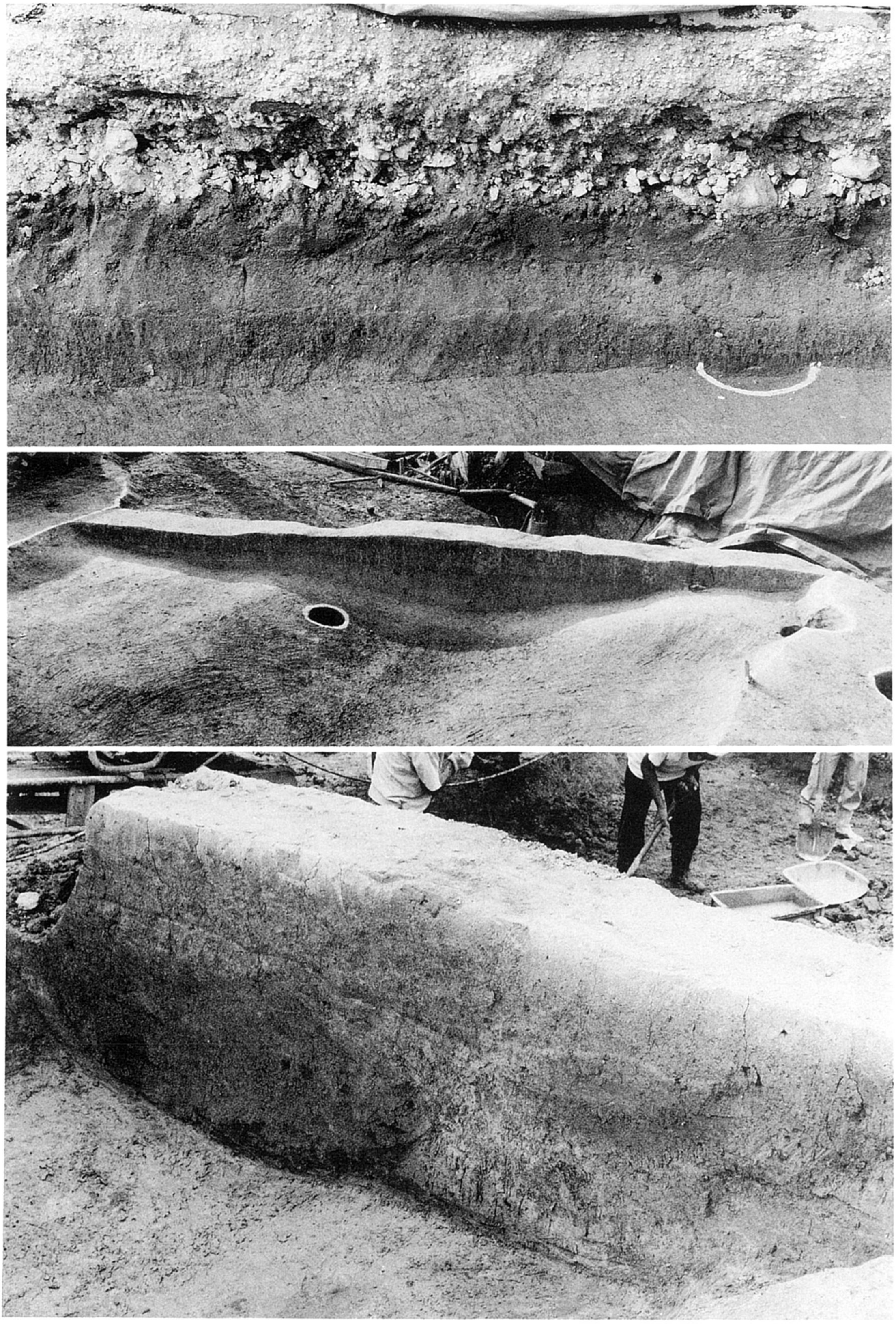
掘立柱建物跡（東より）

溝1（東より）

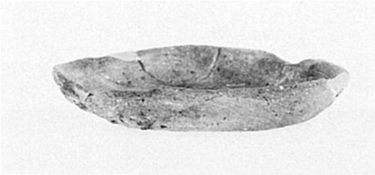
土坑（南より）

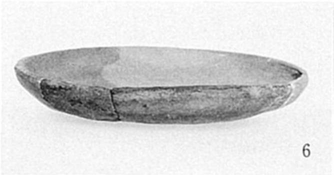
図版5　遺跡　近世鋤溝



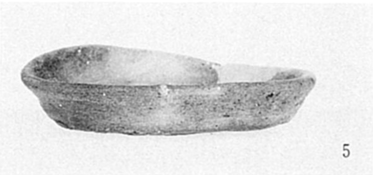


上・土層断面，溝48土層断面，溝46土層断面





6



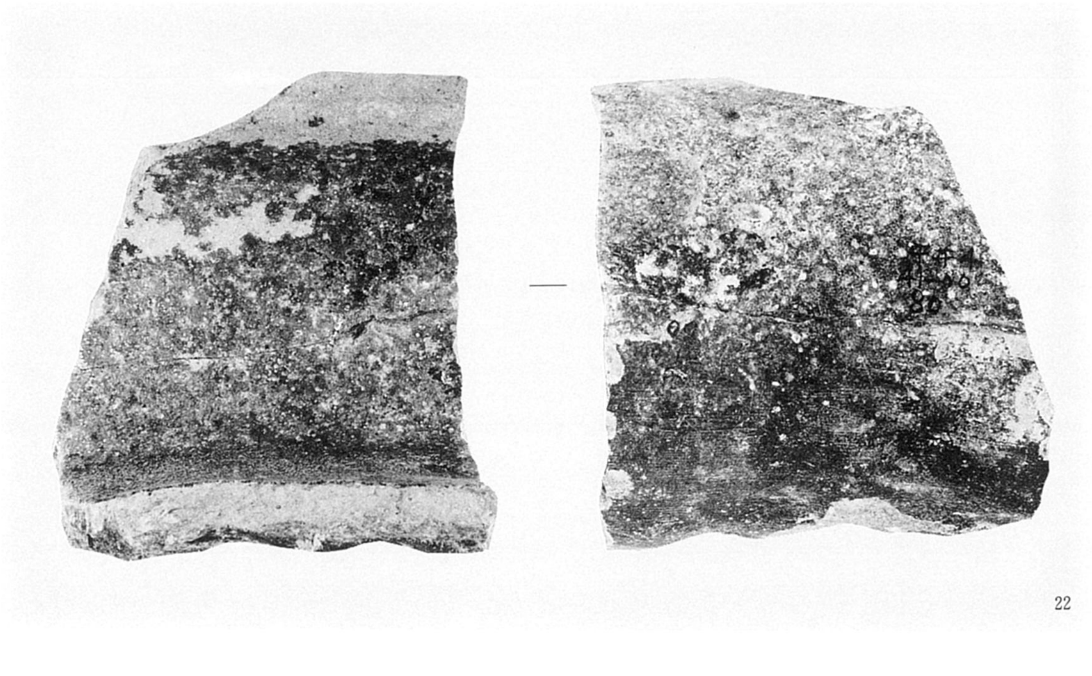
5

3

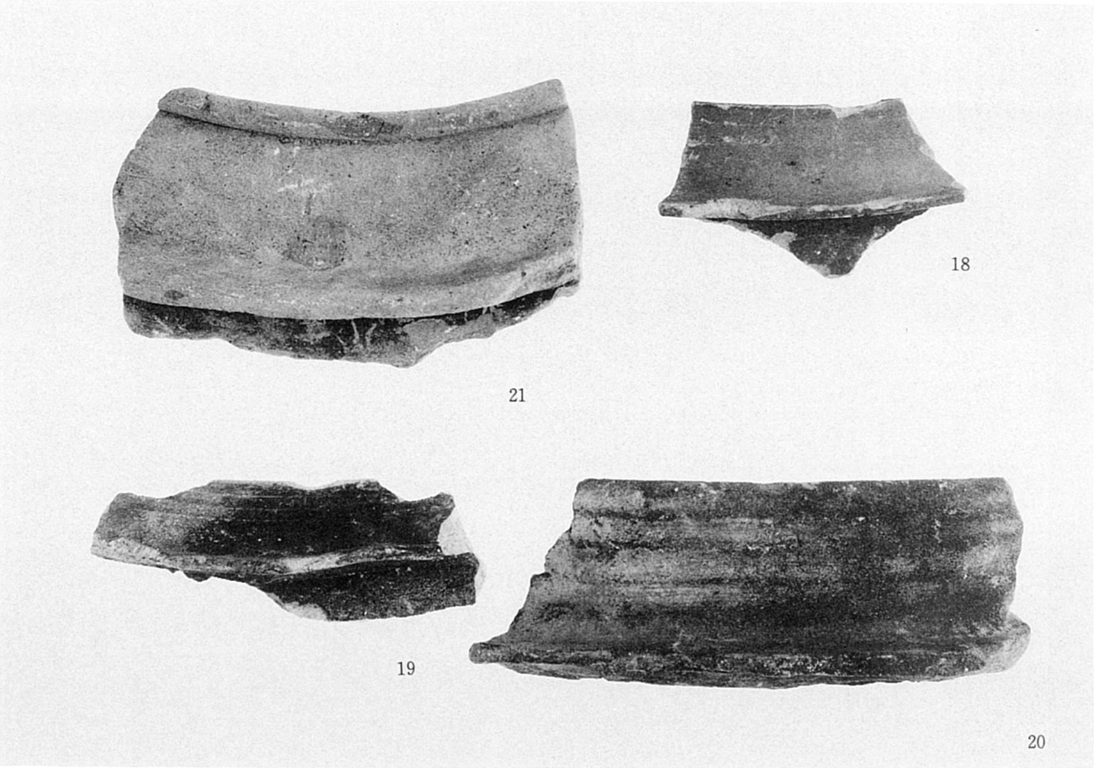
2

4

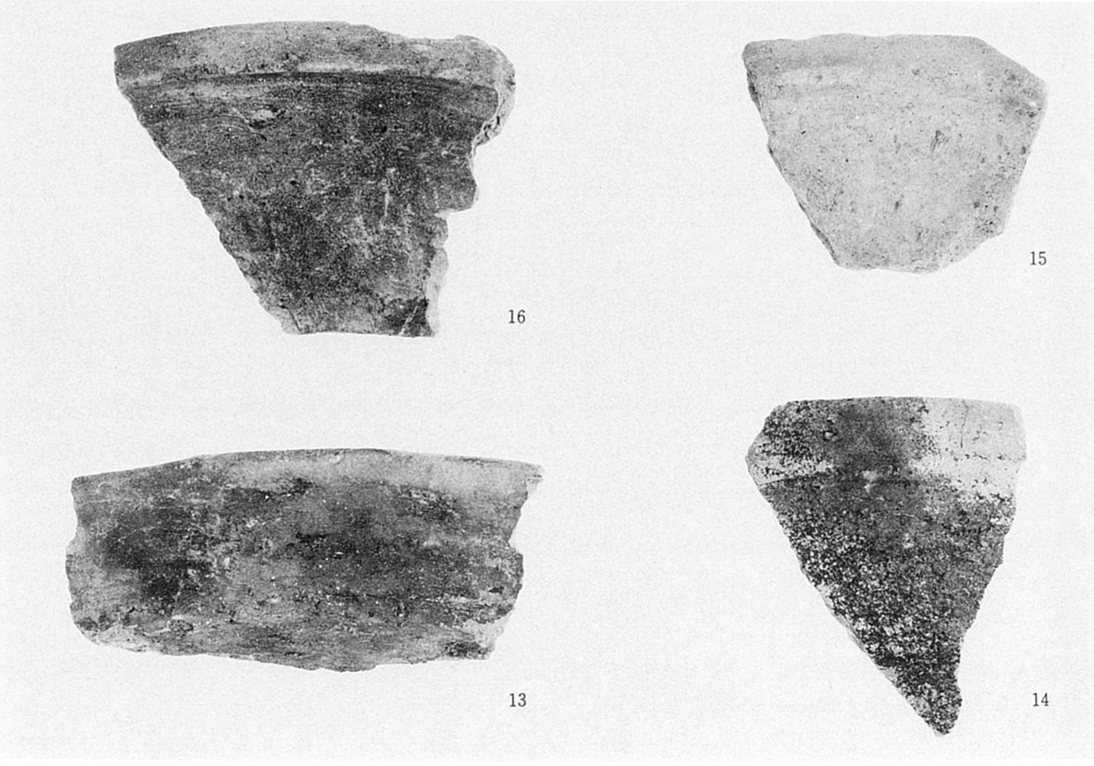
1



22

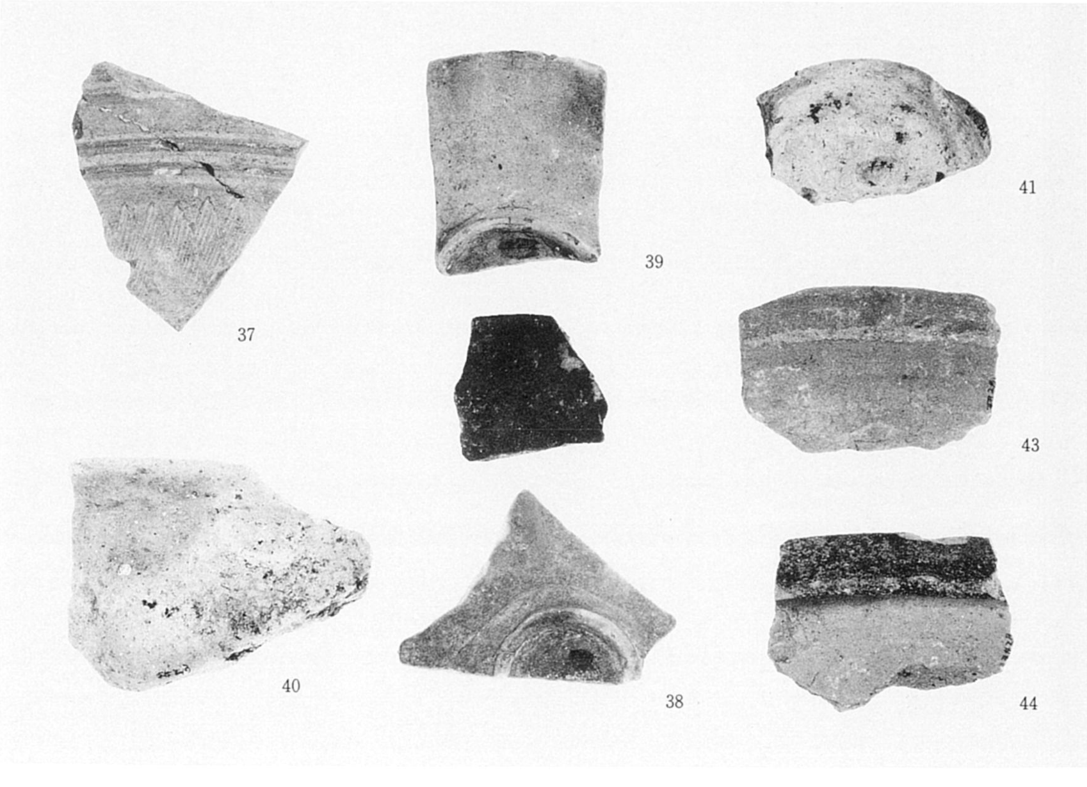


21 18 19 20



16 15 13 14

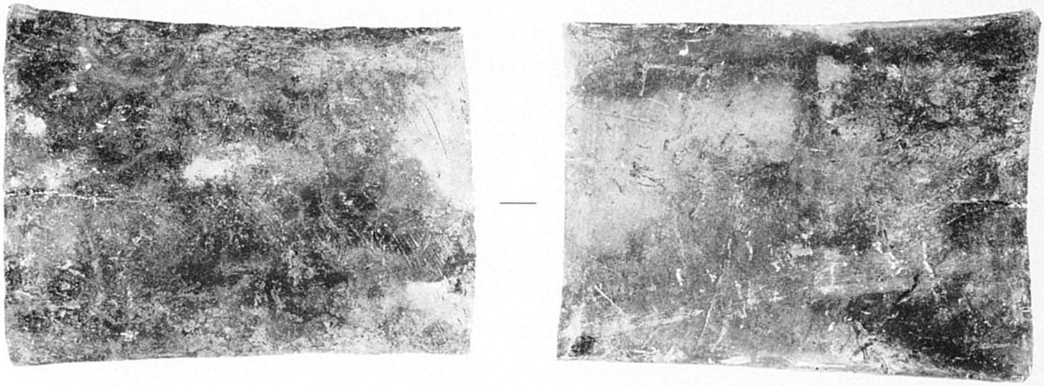
7
9
8


37
39
41
43
40
38
44

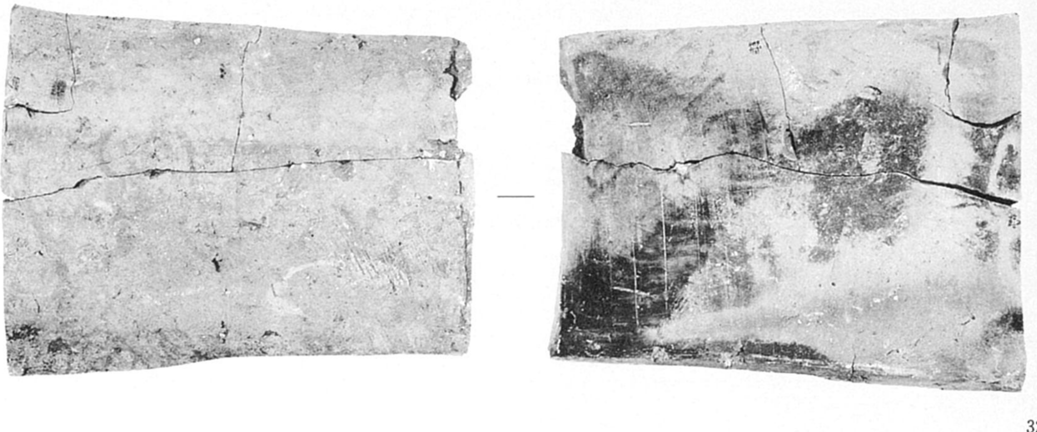
25

23

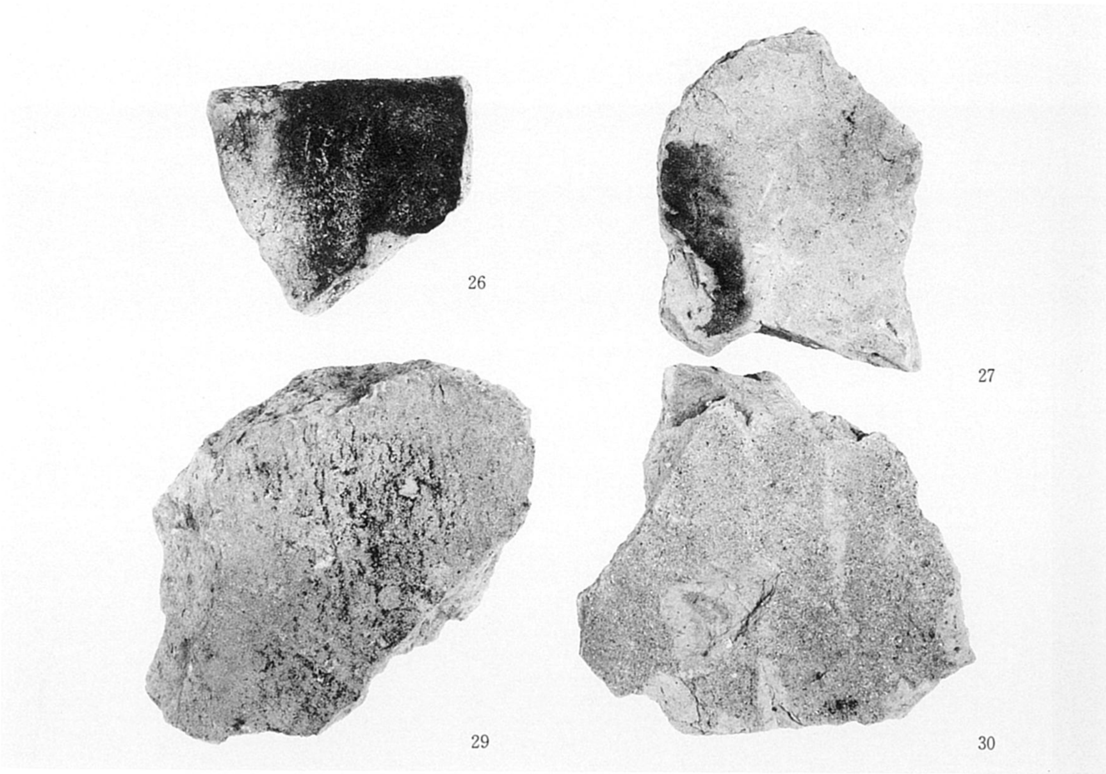
24

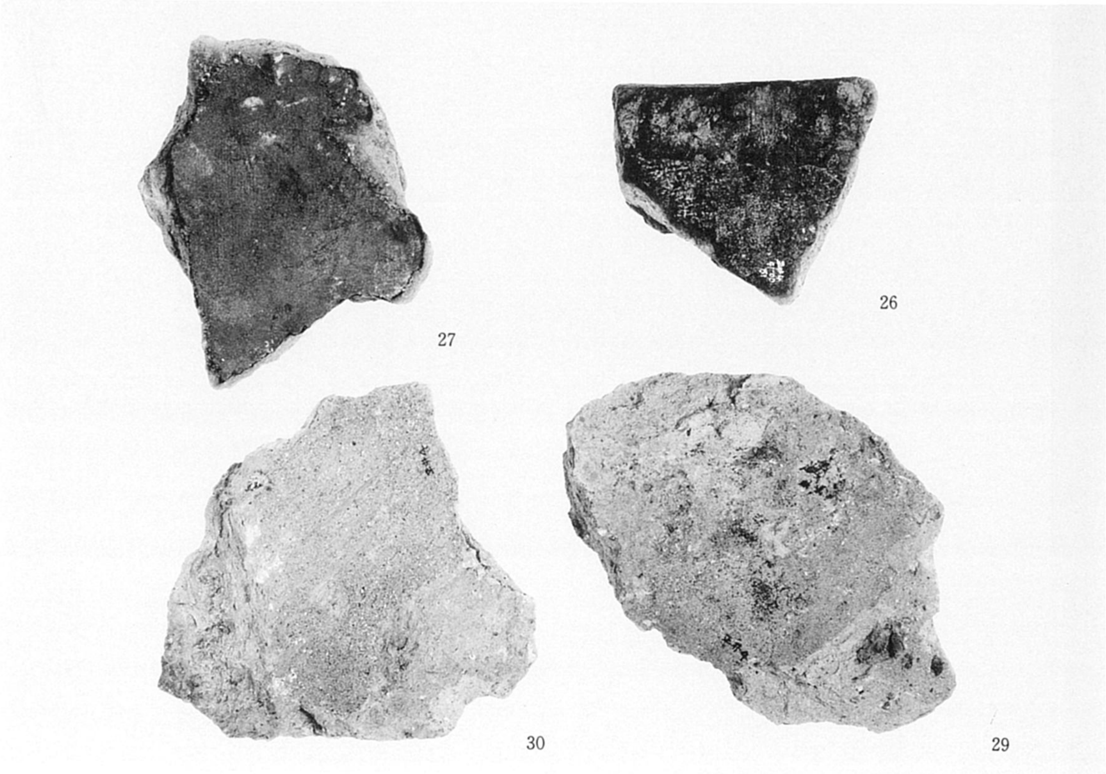


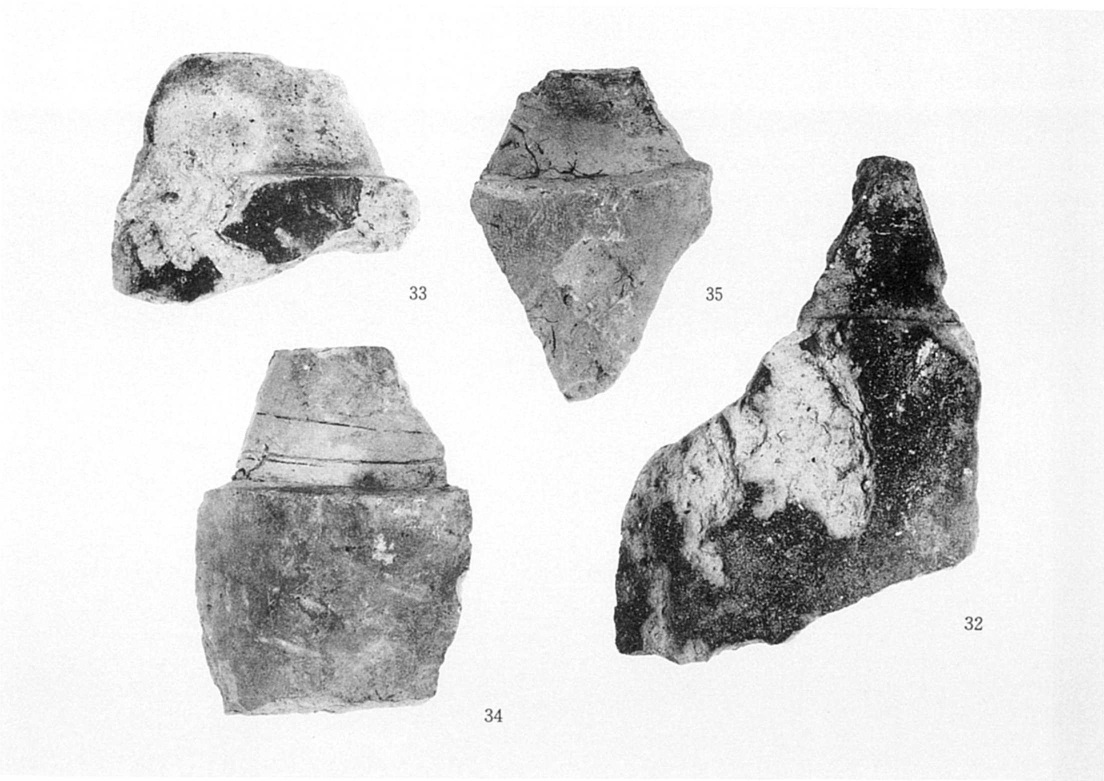
31



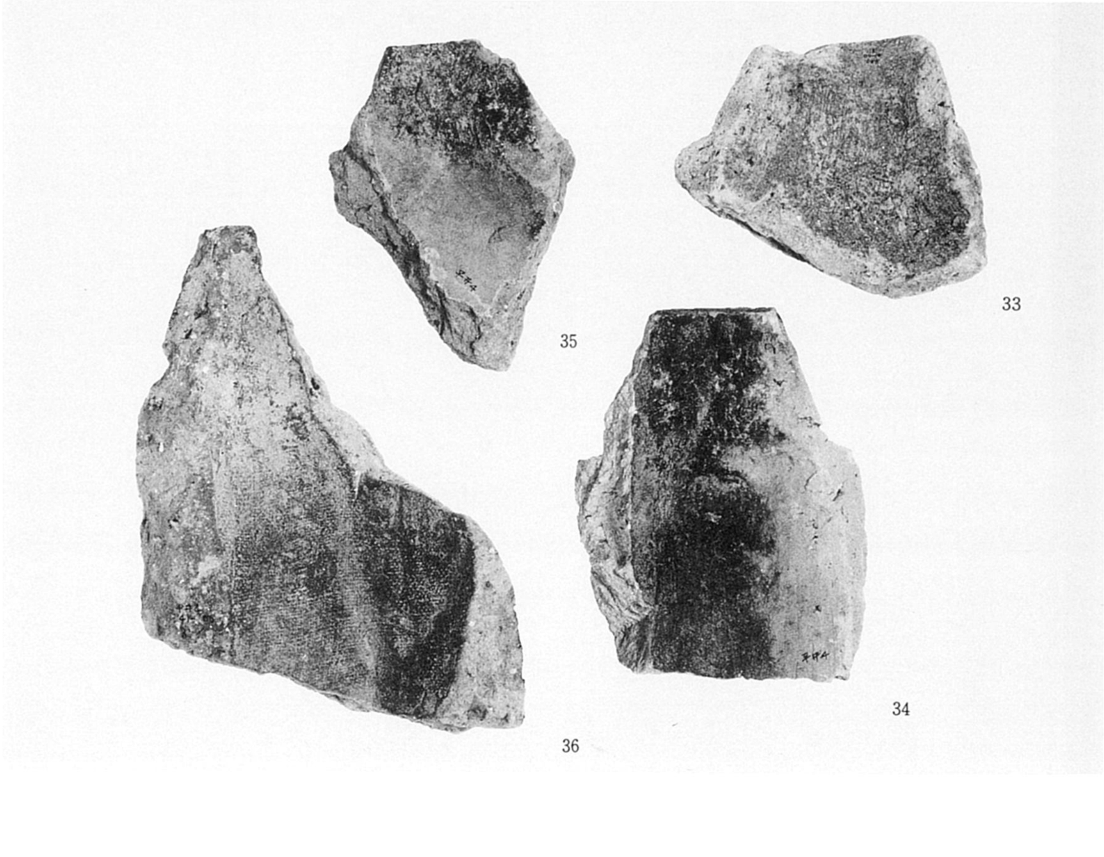
32


26
27
29
30


27
26
30
29



33 35 32 34



35 33 36 34

（財）大阪府埋蔵文化財協会報告書第46輯

平　井　遺　跡　II

都市計画道路松原泉大津線並びに
近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書

平成元年10月31日発行

編集・発行　大阪府教育委員会
財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2番20号　大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所